

昭和二十年の秋、学校からの帰り道に、八月八日の福山市の空襲で、奇蹟的に焼け残った通りの古本屋へ立ち寄りようになった。見慣れない文学や哲学の本を見上げ、なんとなく興味がそそられ始めていた。戦時中は差し控えていた本も書架に並べられていたようだ。

召集前から詩作をしていた次兄は、復員後まもなく詩作を再開して、仲間たちと現代詩の同人誌を起こし、総合詩誌にも作品を発表した一時期があった。それに刺激され私も詩や短歌を作り、半端な文学青年気分であったが、教師になってからは熱がさめてしまった。一方、長兄は、エンジニアでありながら、三十歳代になって、家系のルーツを探ることへの関心から、姓氏や家紋の研究にのめりこみ、いまでもその分野の研究誌の編集をし、かたわらカルチャー教室の講師をしている。

そんな兄たちの影響もあったのだろうか、長い教師生活の中でも、言葉を綴ることへの憧れや愛着が、心のどこかにいつも潜んでいた。しかし怠惰と逡巡のまま退職し、時間にすこしゆとりができると、「何かしなくては、何か書かなくては」という気持ちがあります強まってきていた。

そしてやっと、一九九三年、かつて同じ学校に勤務していたという誼で、西嶋あさ子先生を頼りに、春燈俳句会に入会した。俳句はまったくゼロからの出発であったから、しばらくは、毎月、先生に懇切な添削指導をしていただいた。九九年には春燈目黒句会に加入し、橋爪隆先生から、俳句文法や実作面で指導をしていただいている。

九四年には都の退職者対象のエッセイ教室に参加。九五年にはその教室のOB有志によるエッセイサークルに加入し、尾下正大先生の指導により、作品としての文章作りの要諦が少しずつわかってきた。

しかし、俳句にしてもエッセイにしても、年月を経れば経るほど、むずかしさがわかってきて、得意げに使った語句が、手垢にまみれた常套句だったり、風景でも人間でも「自分の言葉」で、もうひとつ切り込めない歯がゆさを感じる毎日である。

この十年、拙くともなんとか詠みつけ、書きつづけられましたのは、西嶋、橋爪、尾下、三先生のご指導のたまものと、深く感謝しております。

また俳句とエッセイの会の皆さんの存在があったからと、心よりありがたく思っております。